

灰色の世界が広がっていた。

ひどく懐しい。これとよく似た光景を、いく度も見たような気がする。いや、それは見るというより、いつもそこに存在していた。その世界に包みこまれ、でていくことも考えず、ただ抱かれていた。灰色の世界は、生まれる前からそこにあつた。そして永遠にありつづける。

冬の大地。白ではなく、なぜか明るい灰色の世界だ。

そう彼はそこで出会った。

——ヴォールクボーリク！

遠くで叫ぶ声がする。そうだ。まぎれもなく、あの日出会ったのは、ヴォールクだった。一年の大半が雪に閉ざされる故郷で、ほんの短い夏、灰色が茶と緑の世界に変化する。その短い夏のあいださえ、すぐにまた戻ってくる冬への備えをしなければならなかった。

冬、暖炉のぬくもりで真つ白に曇ったガラスをぬぐうと、灰色の世界があつた。野も森も、すべては灰色に閉ざされ、大地の果てまで溶けこんでいた。

だが夏がやってくると、世界は一変する。灰色の霧に吞みこまれていた彼方には、森が広がり、泉が湧き、虫たちの唸り、鳥たちのさえずり、獣たちの叫びで満ちていた。

ワーニャ。

深い水の底からゆっくりと泡が浮きあがってくるように、その名を彼は思い出した。心臓の鼓動が早まるのを感じる。体のどこかが熱い。はつきりと、どことはわからないが体のどこかが燃えている。

ワーニャ。俺たちはあの日出会い、そして永遠の別れを経験した。

——森の奥にいつては駄目よ

母の言葉。ワーニャは八歳だった。愛らしい青い瞳を母からうけつぎ、金色の髪は、彼が三歳のときに死んだ父の、暖炉の上におかれた軍服姿の写真と同じだった。

ワーニャは八歳。彼はあと一週間で十歳になる夏。

冬に備えて、暖炉にくべる小枝を集めに二人は森に入ったのだつた。白い曇りをぬぐうたびに、灰色の渦にかき消されていた、ガラス窓の向こうの森。いつだってそこにあるのに、目に見え、足を踏み入れられるのは、一年のうち、ほんの数カ月しかない。

だからこそ彼は森に惹かれ、許される限り森に通つた。森を恐れたことはない。

ワーニャはちがつた。彼の手を握りしめるワーニャの手は、あの日、汗ばんでいた。怖かつたのだ。森の奥で待ちうける運命を、ワーニャは予感していたのかもしれない。

——手を離さないで、お兄ちゃん

ワーニャが囁いた。

——大丈夫さ、ほら枝を拾って

彼はワーニャの手をひき、森の奥へと進んだ。暖炉で火を起こすとき、格好の種火になる枯れた小枝が、森の奥にはいっぱい落ちていた。

晴れた日だった。ただそれだけで嬉しくて、彼はときおり枝を拾い集める手を休め、目を閉じた。太陽は、額でも鼻でも、頬でも、その存在を感じとれるほどだった。

幸福だった。冬を嫌だと思つたことはなかつたが、夏が好きだった。冬は、嫌いになるにはあまりにも長く、短い彼の人生の大半を占めていた。冬を嫌いになったら、この土地で生きていくことはできない。長い冬と折り合いをつけること、それこそがロシア人の魂を作りだしてきた。

太陽のぬくもりを額で、閉じた^{まぶた}で感じ、そして目を開いたとき、ワーニヤが消えた。森のどこかにいるのだろう。そう、シラカバの木立ちをふりかえり、思つた。

小さな悲鳴。喘ぎ声に近いような、その声を耳にしたのは直後だった。

——ワーニヤ、ワーニヤ！

彼は叫んだ。返事はなかつた。代わりに何か落ち葉と枯れ枝を踏みしめて駆けていく音が聞こえた。妹より重く、そして素早い何か。

雲が太陽にかかり、緑と茶の世界を一瞬ぼやけさせた。冷んやりとした風が木々の葉を揺らし、森の中をまるで目に見えない巨大な何かを通りすぎていくような葉ずれの音がたつた。

——ワーニヤ！

不安がこみあげた。抱えていた小枝の束を地面におろし、森の中を、入ってきた方角を彼はふりかえつた。

二、三歩歩いた。妹の姿はどこにもなかつた。突然、妹は消えていた。

不意に恐怖がこみあげた。大急ぎでこの場を逃げだしたい気持ちにかられ、実際彼はそうしかけた。

だが九歳と十一カ月の子供の心に残るわずかな理性と判断力がそれを押しとどめた、今、自分が森から逃げだしたら、ワーニヤは決して自力では森から帰ってこられない。

——ワーニヤ、どこにいるんだ

自分の声が震えているのを感じた。背中を押す恐怖と戦いながら、彼は一步一步、森の中をたどつた。

陽が翳^{かげ}つたとたん、森はさつきまでの親しみを消していた。鳥のさえずりも、ぶーんという虫の羽音も、どこかからぞらしく、彼に語りかけてくるものではなくなつていく。

立ち止まり、息を殺した。お兄ちゃん、というワーニヤの声を聞きもらすまいと、耳をすませた。

だが妹の声は聞こえなかつた。心配すらない。さらに数歩進み、シラカバの木立ちの中に入りこんだとき、彼は地面に散らばつた小枝を見つけた。それはまぎれもなく、ワーニヤが拾い集めていた、細く短い小枝だった。

ワーニヤに何かが起こつたのだ。まるで風にさらわれたようにワーニヤは姿を消し、そして集めていた小枝だけがここに残っている。

——ワーニヤ！

恐怖は少し薄れ、しかし不可解な気持が強まるのを感じながら、彼は叫び声をあげた。

臆病な妹が、慣れないこの森で、自ら隠れんぼをしかける筈もない。

そのとき、小さな枝を踏みしめる音が、さらに前方の木立ちの陰から聞こえた。彼は駆けだした。

そこは樹木の濃い一角だった。森を抜ける小道も、その一角を迂回するようにまがりくねっている。だが彼は小道を通らず、まっすぐに木立ちの中に入りこんだ。

低くはりだした枝をくぐり、こぶのように地面からつきでた根に足をとられながら木立ちの中を進む。

動悸が速くなつていった。早く、早く見つけなければ。今見失ったら、ワーニヤがどこか、本当に手の届かない遠くへいつてしまふ、そんな気がしていた。

しかしいけどもいけども、ワーニヤの姿はなかつた。動悸も、彼の足も、ますます速まつた。くいしばつた歯の奥、喉の内側からえ、泣き声が洩れそうになる。

木立ちを抜けた瞬間、太陽をおおい隠していた雲が通りすぎた。森に色が戻ってきて、ぬくもりが4

彼の体を包む。

小道がつづいていた。森を抜ける道。それをまっすぐにいけば、野原が広がり、さらにその先には、母と祖父母が待つ我が家がある。彼は矢も盾もたまらない気持にかられた。背骨のあたりがむずがゆくなるような、尿意を急にもよおしたような気分。帰りたい！

小道の先を何かが動くのを見たのは、その瞬間だった。茶色く大きなもの。

彼は導かれるように小道へと走った。だが再び妹への思いに背を引かれ、足どりが遅くなった。

妹がこの道を先に帰ったことはありえない。必ずこの森のどこかにいる。

さらにゆっくりと歩き、ついには足が止まった。彼は立ち止まり、走り抜けた木立ちの方角をふりかえった。

そして、見たのだった。一匹の大きなヴォールクが同じように木立ちの中で立ち止まり、彼を見つめていた。

尖った鼻と、わずかに開いた口からつきだされた舌、瞬きもせず、じっと彼に見いる黒い目。狼を、こんなにも間近で、しかもひとりぼっちで見るのは初めてだった。

恐怖はなかった。ただ身も心も痺しびれていた。

——狼は人を襲わない。もし襲うとすれば、悪い病気にかかった奴か、群れにはぐれ、よほどエサにあぶれた狼だけだ

祖父の言葉がよみがえった。

実際、狼には、彼を襲う気はないように見えた。ただ、なぜそこに彼がいるのかを訝いぶかするような視線を向けてきただけだ。

それはどれくらいのものであったろう。ほんの数秒かもしれないが、そのときの彼には、ひどく長い時間にも感じられた。

この続きは、書籍でお楽しみください。

◎注意

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。

個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。